

二〇二二年三月二日（参加者一六名）

五百羅漢みな春愁の面と見し
法の山紅白の梅曼荼羅に
梅匂ふ不許葷酒の碑過ぎてより
まどろみに似し地蔵の目梅日和
観音の光輪抜けて風光る
右見左見梅の香に磴のぼる
法の日を集め山茱萸黄を点す
梅が枝に透けてはるけき甲山
春光の空に煌めく九輪塔
誰彼となく声かけて梅の丘
天を突く九輪あまねく春日さす
のどけしや吾が顔に似し羅漢かな
紅白の梅のなだるるなぞへかな
枝垂れ梅囲む俳人カメラマン
梅林はアロマテラピーめぐりけり
せせらぎの奏でそめたる早春譜
観音の翳す御手に春日燦
日翳れば白の際立つ梅の丘
春水の一杓水子地蔵へと

うつぎ

〃

〃

〃

〃

宏 虎

〃

〃

〃

ひ かり

〃

〃

百 合

〃

〃

〃

〃

菜 々

〃

梅林を巡る丹の橋見え隠れ

〃

羨道をふちどりて草芳しき

わかば

石棺を抱く古墳や百千鳥

〃

春水の堰落つる音遅しき

ぼんこ

梅日和観音像は伏目がち

〃

朱の御門くぐり華やぐ梅の園

小 袖

法の山上へ下へと梅日和

〃

たつぷりと水子地蔵に春の水

かれん

相輪のことに輝く梅日和

〃

靴の紐蝶々結びに青き踏む

きづな

陰る山照る山四方に梅の溪

〃

観音像翳すおんに風光る

はく子

梅の山へと御手広ぐ観世音

〃

丘を占む風力発電風光る

有 香

溪からの風梅が香を吹き上げ来

よし子

岩田帯授かる寺は梅日和

えいいち

梅の丘より対峙すや甲山

満 天

三脚につまづきさうや梅の道

〃

定例句会みの選

二〇二二年三月二日（参加者一六名）